

肌の色や顔色の表現 (1)

白い肌と青白い顔色

今 村 潔

▶ キーワード

色彩、顔色、小説

▼ 要 旨

肌の色や顔色の表現には、日本語と同じものもあるが、かなりかけ離れたものもある。特に、green という語が使われるのは日本語ではあまりない。そのほかには大理石や象牙などの物を使って肌の白さや美しさを表現することがある。

はじめに

一般的な、アングロ・サクソン系のイギリス人の肌の色は white で表されることが多い。特に健康的な肌の色は “I shan’t be happy till you’re as pink and white as a milkmaid.”¹ のように、pink が添えられる。他にも、“Does it lie all in your beauty—your pink and white complexion, and your yellow hair?”² と美しさの典型として書かれることがある。肌は白くて頬がピンクであることが、美しさの条件であるようだ。それに金髪。特に頬の色は重要で、他に欠点があっても、それを補うほど美しいとして、white という語は無いが、“Her beauty, her pink cheeks and golden curls, seemed to give delight to all who looked at her, and to purchase indemnity for every fault.”³ と言っている。これには、多少ジェインの癖みが入っているかもしれないが。

他にもう一つあげると、“Blond and pink, with dove’s eyes and a gentle smile, he had an air

1 W. Somerset Maugham, *Of Human Bondage*, Penguin Classics, London, 1992, p.450

2 Charlotte Brontë, *Villette*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.148.

3 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.15.

of agreeable tenderness and melancholy,”⁴ と、男性の場合にも当てはまるようである。しかし、度を越すと嫌われるのは当然である。“I hate a man to be red and white, like a painted doll,”⁵ この程度でも女性なら受け入れられるかもしれないが、頬を赤く塗った人形のような顔では、男性は無理であろう。

今回は、white や pink 以外の言葉を使った表現を中心に見てみたい。また、色彩語以外で顔色を表す表現にも焦点を当てる。全体的にはかなり多様な語が使われているので、白色に近い色のみを考察の対象とし、赤い顔色などは次回にまとめる予定である。

1. 白い肌

ここでは、white 以外の語で肌の白さを表している例を取り上げる。

a. Ivory

まず、ivory という言葉を見てみる。この言葉は、アイボリーホワイトとして日本語にもなっている。英語でも white と一緒に使われることもあるが、ivory 単独でも使われる。この語の色彩としての意味は、象牙色、少し黄色がかった白色である。

まず、white と共に使われている例としては、“thence her eye reverted to her hand, ivory white,”⁶ などがあるが、ivory 単独でも白い肌を表す場合を中心に見ていきたい。

美しい女性を表す文として、

She looked wonderfully beautiful with her grand ivory throat, her large blue forget-me-not eyes, and her heavy coils of golden hair.⁷

というものがある。最初に見た女性の美しさの典型、pink and white の肌と金髪を思い起こさせる。白い肌に金髪に加えて、ここでは勿忘草の色のような青い目も入っている。

もう一つ女性の美しさを、象牙と太陽の光のような美しい肌、ばらのような頬、顔を埋めなくなるような美しい髪などと並べ立てている文があった。

She had the most adorable little nose and large brown eyes—he would describe her to Hayward—and masses of soft brown hair, the sort of hair it was delicious to bury your face in, and a skin which was like ivory and sunshine, and her cheek was like a red, red rose.⁸

4 Robert Louis Stevenson, *New Arabian Nights*, “The Rajah’s Diamond”, *The Complete Works*, Vol.1, Cambridge Scholars Publishing, 2008, Newcastle upon Tyne, p.58.

5 Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.154.

6 Charlotte Brontë, *Professor*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.96.

7 Oscar Wilde, “Lord Arthur Savile’s Crime” in *Complete Shorter Fiction*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.19.

8 W. Somerset Maugham, *Of Human Bondage*, p.151.

この場合は、sunshineという言葉があるので、肌の色には温かみがあるように感じられる。そして、“Kate felt for the time startled and forlorn, then a slow anger burned in her warm ivory cheek.”⁹と温かみがあるとはっきり表現している例もある。この ivory という語が、真っ白ではなく、少し黄色みを帯びているから、こういうニュアンスが出てくるのであろう。

白い色のほうが強調されると、血の気のない肌を表すことになる、“her cheeks had no colour in them, but were ivory white and pinched as if with cold.”¹⁰ 他にも、“Her health was not good now, and there had come that ivory pallor into her face which he never noticed,”¹¹ というように、病気のため、今まで見たことのないような白い色になったことを表すことがある。

しかし、ivory は white だけではなく、yellow と共に用いられることがある。たとえば、“Her arms were finely shapen, but glossy and yellow as old ivory.”¹² という文では、古い象牙の持つ黄色く輝くような艶が肌に現れていることがわかる。

この古い象牙のような肌は、一時期人気があったようである。

She had the fine black eyes, languid but passionate, the thin face, ascetic but sensual, the skin like old ivory, which under the influence of Burne-Jones were cultivated at that time by young ladies in Chelsea.¹³

ここでは、yellow という語は出てこないが、古い象牙は当然新しいものより黄色くなっているはずであり、ここでもそのニュアンスが含まれるであろう。ラファエロ前派の画家バーン・ジョーンズの絵の影響から、芸術家が多く住んでいた地域の若い女性が好む肌の特徴だった。

しかし、黄色みを帯びているからといって、必ずしも温かみのある好ましい肌であるとは限らないようである。

A man in threadbare clothing, whose age was difficult to guess—from the dead yellowish flatness of the flesh, something like an old ivory carving—was seated on a stool against some bookshelves.¹⁴

ここでは、古い象牙に見られるような黄色い肌は死人を連想させるもののようである。この yellow という語は、老人の肌の色を表現するときによく使われる語なので、黄色が濃くなるとかえってマイナスのイメージが強くなるのであろう。

9 D.H. Lawrence, *The Plumed Serpent*, Cambridge University Press, Cambridge, 1987, p.168.

10 Galsworthy, *The Forsyte Saga*, Oxford University Press, Oxford, 1999, pp.278-9.

11 D.H. Lawrence, *Sons and Lovers*, Part 2, Cambridge University Press, Cambridge, 1993, p.358.

12 Ibid., p.303.

13 W. Somerset Maugham, *Of Human Bondage*, p.195.

14 George Eliot, *Daniel Deronda*, Oxford University Press, Oxford, 2009, p.326.

b. Lily

この語はユリの花のような白さという意味で使われる。まず、white と共に使われている例を見ると、“And waving her hand, white as a lily and fine as a fairy’s,”¹⁵ のように、肌の白さ、美しさを表現している。他にも、“A vivid scarlet spot now shone with preternatural brightness in the centre of each cheek, leaving the remainder of her face lily-white as before.”¹⁶ のように、頬の赤らみに対して顔の白さを述べているものもある。

この lily という語には、ユリの花のような白さだけではなく、美しさも表すことがある。たとえば、“both sisters were fair as lilies.”¹⁷ と言っているのは容姿の美しさのことであろう。他にも、“I don’t wonder at thee for loving her, Seth. She’s got a face like a lily.”¹⁸ とこの女性が美人だから、彼女が好きなことはわかるというように言っている。

しかし、fair という語があっても顔立ちの美しさだけを言っているとは限らないようである。たとえば、否定として言っているが、“your face was never lily-fair, but it is olive-green now.”¹⁹ という文では、顔の色が olive-green だから fair ではないと言っている。おそらく lily という語が持つ美しいという意味には白いということが含まれているのであろう。

この語は本来花の名前なので、この語が示す白い肌は、ほとんどが女性である。男性の例としては、オスカー・ワイルドが、ウィリー・ヒューズの手を “his white lily hands”²⁰ と書いているものがあげられる。他の作家に用例があるかどうかはわからないが、ワイルドの好みが反映されていると考えられる。

百合の花の形からの連想であろうか、手や首の表現に用いられることが多い。たとえば手では、“the two Miss Pecksniffs put forth each her lily hand,”²¹ や “It might be deemed a breach of trust, I thought, to convey that lily hand to my lips,”²² 首では、“her curls fell full and long on her lily neck;”²³ など多数上げられる。

美しい白い肌ではなく、顔色が蒼白になっている場合もある。この表現に関しては次の章で取り上げるが、lily が使われている例は、ここであげておく。まず、“You look like a lily—so pale and fainty!”²⁴ のような文が例としてあげられる。ハーディのこの作品のほかの部分でも、“And when they came out her eyes were shining and she was as white as a lily;”²⁵ と顔を白くして泣いている様子が描かれている。

15 Charlotte Brontë, *Shirley*, Oxford University Press, Oxford, 2007, p.174.

16 Thomas Hardy, *A Pair of Blue Eyes*, Oxford University Press, Oxford, 1985, p.260.

17 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.171.

18 George Eliot, *Adam Bede*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.111.

19 Charlotte Brontë, *Shirley*, p.443.

20 Oscar Wilde, “The Portrait of Mr. W. H.” in *Complete Shorter Fiction*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.159.

21 Dickens, *The Life and Adventures of Martin Chuzzlewit*, Oxford University Press, Oxford, 2009, p.72.

22 Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, p.338.

23 Charlotte Brontë, *Villette*, p.430.

24 Hardy, *Far From the Madding Crowd*, Oxford University Press, Oxford, 2002, p.271.

25 Ibid., p.218.

c. Cream, Creamy

白い肌でも少し温かみがあるような場合には、creamyが使われるようだ。生命力あふれる腕についてロレンスは、“Her arms were creamy and full of life beside the white lace;”²⁶と書いている。

血行が良くなった肌をゴールズワージーは、

And he had long to wait, watching Irene bloom, the lines of her young figure softening, the stronger blood deepening the gleam of her eyes, and warming her face to a creamy glow;²⁷

と表現しているし、若いころの肌を “In youth her cheeks had been of cream and roses,”²⁸とも書いている。ここでは、rosesという語があるので、理想的な美しさの例として最初にあげた pink and whiteと同様の表現であろう。

モームに、目の前にいるときは、あらが目立つが、目の前にいないときは、美しく思えるとして、

Away from her he thought her beautiful, remembering only her magnificent eyes and the creamy pallor of her face; but when he was with her he saw only that she was flat-chested and that her teeth were slightly decayed;²⁹

と書いている部分がある。漠然と白い肌の美しさが思い起こされているわけであるが、この場合は、pallorという語のために、温かみは感じられないかもしれない。

少し変わった例では、メキシコ人の肌の色を言っている場合がある。“and one stout man with the curious creamy-biscuit skin of the city Mexicans.”³⁰ メキシコ人なら普通は、brown系統の色を示す語が使われるが、メキシコ人にとっては白い色なのであろう。

d. その他

肌の白さを表す場合に alabaster（雪花石膏）という語が用いられることがある。小説では、あまり用例は無いようであるが、モームには理想の女性像として、すみれ色の目、白い肌、金髪をあげて

he had often pictured to himself the great violet eyes and the alabaster skin of some lovely girl, and he had thought of himself burying his face in the rippling masses of her auburn

26 Lawrence, *Sons and Lovers*, Part 2, p.302.

27 Galsworthy, *The Forsyte Saga*, p.111.

28 Ibid., p.206.

29 Maugham, *Of Human Bondage*, p.226.

30 Lawrence, *The Plumed Serpent*, p.90.

hair.³¹

と言っている。

コンラッドにも “The head of the magistrate was half hidden by the paper, his brow was like alabaster.”³² という表現がある。

肌の白さの表現として、ジョージ・エリオットに、snowy という語を使った次のような文がある。

And he had known how to choose a wife, too, for his lady, hanging opposite to him, with her sunny brown hair drawn away in bands from her mild grave face, and falling in two large rich curls on her snowy gently-sloping neck, which shamed the harsher hue and outline of her white satin robe, was a fit mother of 'large-acred' heirs.³³

ここでは、結婚相手にふさわしいとして、美しい白さであることが強調されている。

最後に milky という語も肌の白さを表すのに使われる。

Beside him was a lady with skim-milky eyes and complexion, belonging to the “interesting” class of women, where that class merges in the sickly, her greatest pleasure being apparently to enjoy nothing.³⁴

脱脂粉乳のような目と顔色の人物であり、病弱者たちの仲間に入る。肌の色としては、あまり良くないのであろう。

2. 青白い顔色

ここでも、一般的な white や pale などとは取り上げず、他の言葉を中心にしてみる。

a. Blue

日本語でも青白い、蒼白という言葉があるように、英語でも blue が使われる。いくつかの状況があるが、まず、寒さで肌の色が変わった場合をみると、水の中に入っていて、肌の色が変わった様子を “how naughty Philip had been in not coming out of the water till he was blue with cold.”³⁵ とモームは書いている。また他にも、ハーディは、寒さで青ざめた肌を

31 Maugham, *Of Human Bondage*, p.142.

32 Joseph Conrad, *Lord Jim*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.115.

33 George Eliot, *Scenes of Clerical Life*, “Mr. Gilfil's Love-Story”, *The Writings of George Eliot Vol.1*, AMS Press, New York, 1970, pp.151-2.

34 Thomas Hardy, *A Pair of Blue Eyes*, p.138.

35 Maugham, *Of Human Bondage*, p.596.

But she was an heroic girl, and though her out-stretched hand was chill as a stone, and her cheeks blue, and her cold worse than ever, she would not complain while he was disposed to continue work.³⁶

と書いているし、さらにロレンスにも “She was shivering with cold. Her almost naked arms were blue.”³⁷ という文がある。ディケンズには、

All this time, Mr. Winkle, with his face and hands blue with the cold, had been forcing a gimlet into the sole of his feet,³⁸

How many winter days have I seen him, standing blue-nosed, in the snow and east wind, looking at the boys going down the long slide, and clapping his worsted gloves in rapture!³⁹

のように、顔や体の一部が青くなっている様子を描いているものもある。

次に、顔色が青ざめる場合を取り上げてみると、ショッキングな話を聞いて、“Uriah, more blue than white at these words, made a dart at the letter, as if to tear it in pieces.”⁴⁰ と青くなったり、ののしられて、“So I turned to him and slanged him till all was blue.”⁴¹ と真っ青になったりする。他にも、“I’ve heard you and Dad talk about it till you were blue in the face.”⁴² などがある。

また恐怖を感じたときも、“she was blue with fright herself,”⁴³ 青くなる。次のような例もある。幽霊かなにか怖いものを見た人のような顔になり、茶色の肌の色が消え、鼻が青くなっている。

The captain spun round on his heel and fronted us; all the brown had gone out of his face, and even his nose was blue; he had the look of a man who sees a ghost, or the evil one, or something worse, if anything can be;⁴⁴

やつれた青白い肌の色として、“I looked at his bluish feeble hands as he laboriously washed himself.”⁴⁵ という文もある。

36 Hardy, *The Woodlanders*, Oxford University Press, Oxford, 2005, p.59.

37 D.H. Lawrence, *The Trespasser*, Cambridge University Press, Cambridge, 1981, p.57.

38 Charles Dickens, *The Posthumous Papers of the Pickwick Club*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.367.

39 Dickens, *David Copperfield*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.244.

40 Ibid., p.731.

41 Conrad, *Lord Jim*, p.140.

42 Maugham, *Of Human Bondage*, p.607.

43 George Orwell, *Nineteen eighty-four*, Penguin Classics, London, 1989, p.10.

44 Robert Louis Stevenson, *Treasure Island*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.9.

45 Lawrence, *The White Peacock*, Cambridge University Press, Cambridge, 1983, p.321.

ラム酒を飲みすぎると青くなるようである。

“He were an ugly devil,” cried a third pirate with a shudder; “that blue in the face too!”

“That was how the rum took him,” added Merry. “Blue! Well, I reckon he was blue. That’s a true word.”⁴⁶

強い酒を飲みすぎて、肌が病的な色になっているのであろう。

b. Green

日本語では、木々の緑を「青い」ということがあるが、顔色が青白いというときに、緑色のニュアンスは無いであろう。しかし、こういうときに英語では、greenが使われることがある。たとえば、血を見て思わず顔を背けたときの顔色の変化をロレンスは、“Halliday, turning green and averting his face.”⁴⁷ のように表現している。

怒ったときは、血が上って顔色は赤くとなると思われるが、逆に血の気が引いて青白くなることがあるのかもしれない。たとえば、“Just look at Lovat, green with fury.”⁴⁸ や、批判されたときに “And what must I do?” he asked, green.”⁴⁹ と言うときのように、greenが使われている。両方ともロレンスからの引用であるが、ロレンスは他の小説で、

“You look a sight, you do, red in the face,” she cried.

“I might look worse if I was green,”⁵⁰

と、顔が赤くなるときよりも、もっとひどくなると緑になると言っている。顔色がかなり悪いことはわかる。さらにもうひとつ例をあげると、

The man’s face, already very pale, turned a colour Winston would not have believed possible. It was definitely, unmistakably, a shade of green.⁵¹

すでに、顔色は悪く蒼白だったが、さらに悪くなり緑色になった。これは信じられないことであると言っているので、greenは特殊な顔色なのであろう。

他にも顔色の悪い人物が登場する。すべてロレンスからの引用であるが、“He was about thirty or thirty-three years old, thin, greenish, with a long nose and a sharp face.”⁵² と “Opposite, by

46 Robert Louis Stevenson, *Treasure Island*, p.175

47 Lawrence, *Women in Love*, Cambridge University Press, Cambridge, 1987, p.71.

48 Lawrence, *Kangaroo*, Cambridge University Press, Cambridge, 2002, p.292.

49 Lawrence, *Lady Chatterley’s Lover*, Cambridge University Press, Cambridge, 1993, p.182.

50 Lawrence, *The Rainbow*, Part 1, Cambridge University Press, Cambridge, 2002, p.96.

51 George Orwell, *Nineteen eighty-four*, p.248.

52 Lawrence, *The Rainbow*, Part 2, p.344.

the fire, sat a little, greenish man—evidently an oriental.”⁵³ などがある。

この表現はロレンスやオーウェルなど近代の作家のものが多いが、yellow とあわせた使い方はそれ以前からあった。ディケンズに、

Sarah Pocket came to the gate, and positively reeled back when she saw me so changed; her walnut-shell countenance likewise, turned from brown to green and yellow.⁵⁴

という文がある。また、シャーロット・ブロンテにも、“She would pine away in green and yellow melancholy if she had not my six feet of iniquity to scold.”⁵⁵という表現がある。これは、シェークスピアの「十二夜」からの引用である。⁵⁶

他には驚いて顔色が変わった様子を

He had no sooner noticed her features than his helmet nearly fell from his hand; his face became suddenly fixed, and his natural complexion took itself off, leaving a greenish yellow in its stead.⁵⁷

と表現している文がある。オスカー・ワイルドからも、“When he saw Lord Arthur he started, and his coarse, fat face became a sort of greenish-yellow colour.”⁵⁸ という例をあげることができる。

Yellow については次回取り上げる。

もう一度 green 単独の場合に戻る。今まで見たように顔色が悪い場合を表すので、病的な感じがする。貧血で頬にもまったく赤みが無いような人物、“She was very anaemic. Her thin lips were pale, and her skin was delicate, of a faint green colour, without a touch of red even in the cheeks.”⁵⁹ はこのように書かれている。顔に病的な斑点がある人物もいる。

It is habitually hard upon Sir Leicester, whose countenance it greenly mottles in the manner of sage-cheese and in whose aristocratic system it effects a dismal revolution.⁶⁰

青かびチーズのような状態であろうか。黒痣が治って、もとの肌の色になる前にも green になるようである。

53 Lawrence, *Aaron's Rod*, Cambridge University Press, Cambridge, 1988, p.18.

54 Dickens, *Great Expectations*, Oxford University Press, Oxford, 1998, p.154.

55 Charlotte Brontë, *Villette*, p.187.

56 Shakespeare, *Twelfth Night*, II, iv, 109, Cambridge University Press, Cambridge, 2003, p.98.

57 Hardy, *The Trumpet-Major*, Macmillan, London, 1923, p.154.

58 Oscar Wilde, “Lord Arthur Savile's Crime” in *Complete Shorter Fiction*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.27.

59 Maugham, *Of Human Bondage*, p.268.

60 Charles Dickens, *Bleak House*, Oxford University Press, Oxford, 2008, pp.168-9.

This guileless confectioner was not by any means sober, and had a black eye in the green stage of recovery, which was painted over.⁶¹

c. Grey

血の気が引いて、顔色が悪くなったというようなときに、greyが使われることがある。たとえば、“Her colour had ebbed, and she was grey.”⁶² のようにである。他にも、“Sylvia took her hands away from her face; it was grey as the face of death;”⁶³ などがある。

他の場合を見ると、寒さで顔色が変わるときにも、“Their faces were grey with cold.”⁶⁴ 使われているし、恐怖で蒼白になったときにも、“But what most struck Winston was the look of helpless fright on the woman’s greyish face.”⁶⁵ また、妻が出て行ったことを知り “He was too pale, a greyish tinge all over his face;”⁶⁶ さらに、気絶しそうになったときも、“She had a bad fainting bout. So grey her face was, so blue her mouth!”⁶⁷ 自分の言葉に反論されたときも、“Her face took on a greyish tinge.”⁶⁸ というように、顔色はgreyになる。

また、greyの場合には独特の例として、年をとって肌の色が変わるという使い方がある。たとえば、中年過ぎの女性の肌として、

Her face had gone slightly grey, her nose was sharp and dusky, and her voice hammered almost like metal, a slow, distinct, peculiar hard music of its own.⁶⁹

さらに中年の女性を雌猫にたとえて、

One after the other, her women ‘friends’, the powerful love-women, at the age of forty, forty-five, fifty, they lost all their charm and allure, and turned into real grimalkins, greyish, avid, and horrifying, prowling around looking for prey that became scarcer and scarcer.⁷⁰

などと、言っている。これは、若いときに見られるような頬の赤み、血の気がなくなった結果であろう。

それで、病気のときや、死ぬ直前、死んだ人などの肌の色を表すことにもなる。たとえば、病気でやつれた人は、“Aaron lay still, rather grey and peaked-looking, in a stillness that was not

61 Dickens, *Great Expectations*, p.168.

62 E. M. Forster, *Howards End*, Penguin Classics, London, 2000, p.259

63 Elizabeth Gaskell, *Sylvia’s Lovers*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.379.

64 Maugham, *Of Human Bondage*, p.212.

65 George Orwell, *Nineteen eighty-four*, p.26.

66 Galsworthy, *The Forsyte Saga*, p.271.

67 Lawrence, *Sons and Lovers*, Part 2, p.347.

68 Lawrence, *The Lost Girl*, Cambridge University Press, Cambridge, 1981, p.45.

69 Lawrence, *The Plumed Serpent*, p.32.

70 Ibid., p.438

healthy.”⁷¹であり、劇場で倒れて、半分意識を失ったような状態の人は、“She looked at his face. It was grey and blank.”⁷²となり、死を間近にした人は、“The last time the dying man asked to see Gudrun he was grey with near death.”⁷³と表されている。

d. Marble

この語の場合は、肌の色に関する限り、美しい白さを表す例はあまり無いようである。肌の白さを表しているものとして、“her face, naturally pale as marble, appeared to be assuming also the coldness and fixity of that material;”⁷⁴があげられるが、美しい白さではなく、もともと青白い肌をしている。

この語は、美しさではなく、青ざめた顔色をあらわす表現としてよく使われる。たとえば、“she sat incapable of thought, or speech, or outward show of grief: as rigid, and almost as white and cold, as marble.”⁷⁵のように、あまりの恐怖と絶望で白く、冷たくなった肌や顔色を表す。他には、“she was pale as the white marble slab and cornice behind her;”⁷⁶や病人の顔色 “the hue of her countenance had changed to a marble whiteness.”⁷⁷の表現として用いられる。独房にいるやつれた顔も “The face was marble now; the sweet lips were pallid and half-open and quivering;”⁷⁸と書かれている。

さらには、死人の顔色の表現になる。“And she was white as marble-stone,”⁷⁹や “there seemed to be a smile of some sort upon the marble features of Jude;”⁸⁰などが、例としてあげられる。

肌の色としては、美しさはあまり無いようであるが、顔立ちの美しさを表すことがある。たとえば、“I had never seen that handsome-featured face of his look more like chiselled marble than it did just now,”⁸¹や “I look at his firm, marble chin, at his straight Greek features.”⁸²のように、この表現はギリシャの彫刻のイメージから来ているのであろう。ここからさらに、優れた人という意味にもなる。大理石とごみを対比して、“because you don’t think yourself a fine figure in marble and us nothing but dirt.”⁸³というような発言があった。

肌の色以外の表現をもう少し付け加えておくと、硬い表情、“The marble hardness left her

71 Lawrence, *Aaron’s Rod*, p.90.

72 Lawrence, *The Lost Girl*, p.172.

73 Lawrence, *Women in Love*, p.285.

74 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, p.63.

75 Charles Dickens, *Barnaby Rudge*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.473.

76 Charlotte Brontë, *Shirley*, p.393.

77 Dickens, *Oliver Twist*, Oxford University Press, Oxford, 1999, p.257.

78 George Eliot, *Adam Bede*, p.412.

79 Hardy, *The Mayor of Casterbridge*, Oxford University Press, Oxford, 2004, p.112.

80 Hardy, *Jude the Obscure*, Oxford University Press, Oxford, 2002, p.396.

81 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, p.377.

82 Charlotte Brontë, *Villette*, p.424.

83 D.H. Lawrence, *Sons and Lovers*, Part 2, p.311.

face,”⁸⁴ 不動、“he replied, maintaining a marble immobility of feature.”⁸⁵ 肌のなめらかさ、“the marble smoothness of the sloping forehead”⁸⁶ 肌の冷たさ、“Dorothea’s hand was of a marble coldness.”⁸⁷ などの例がある。

e. その他

顔色の白さを表すときに、chalky という語が使われることがある。この語も用例はあまり無いが、例をあげておくと、教会の中の厳粛な雰囲気や畏敬の念を感じたときに

His uplifted face, with the awed and wistful look which faces take on themselves in church, was whitened to a chalky hue in the vast building.⁸⁸

賭けに負けて蒼白になって

He lost; and while his antagonist smilingly swept away the stakes, he turned chalky white, drew back in silence, and wiped his forehead.⁸⁹

などがある、少し変わったところでは、肌が乾燥していて、毛穴まで白っぽい “her dry white hands (so dry that the pores of her skin look chalky)”⁹⁰ という表現もある。

そのほかの例としては、ねずみ色の肌、“She was a rather short, stout, mouse-coloured, creepy kind of woman with a high colour in her cheeks, and dun, close hair like a cap.”⁹¹ や病人の様子を死の土色と表現したもの、“The flesh was sunk, the features prominent, bony, and rigid. The fearful clay-colour of death was over all.”⁹² そして、まさに灰色として処刑場に向かう囚人の顔を “the ashy hue upon his face, his clammy brow, the wild distraction of his eye,”⁹³ と表現している。

結び

白い肌の色や青白い顔色の表現はかなり多様なものがあつた。直接色に言及するだけではな

84 Hardy, *Tess of the d’Urbervilles*, Oxford University Press, Oxford, 2005, p.95.

85 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, p.357.

86 George Eliot, *Scenes of Clerical Life*, “Mr. Gilfil’s Love-Story”, p.142.

87 George Eliot, *Middlemarch*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.461.

88 Galsworthy, *The Forsyte Saga*, p.63.

89 Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, p.158.

90 Wilkie Collins, *The Woman in White*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.218.

91 Lawrence, *The Lost Girl*, p.12.

92 Gaskell, *Mary Barton*, Oxford University Press, Oxford, 2008, p.69.

93 Dickens, *Barnaby Rudge*, p.607.

く、何か外の物を利用して顔色を表現するものも多くあった。何よりも、顔色の変化に関心を寄せている作家が多くいることがわかった。顔色の変化で人物の内面を表すことができるからであろう。

今回は紙面の都合上白いもののみを取り上げた。これ以外の、赤くなった顔などは次回まとめる予定である。